

# Ai研 NewsLetter No.7

相澤病院臨床研修センターニュース

2011年6月21日

## 研修と恩返し

I read with great interest an article written by Dr.Kyo titled “Pay It Forward” (PIF) in a recent issue of Nagano Ihou (Monthly of the Nagano-ken Medical Association, June 1,2011). PIF is the key phrase in the novel “Pay It Forward” by Catherine Ryan Hyde , which was published in 1999 from the POCKET BOOKS and then adapted into a Warner Brothers film with the same title. A boy in the social studies class of a junior high school thought of an idea, which was described as an obligation to do three good deeds for others in repaying of a good deed that one received. In this way, the deed can spread exponentially through society with the goal of making the world a better place.

The concept of PIF is not new as you might suspect; Wikipedia says that it dates back to the Greek Age. For sure, though, the concept became very much popularized after the movie and it has even become an international movement in the form of foundation.

As PIF refers in essence to repaying the good deeds one has received by doing good things for other unrelated people, what Dr.Kyo was recommended by his mentor on finishing his residency in the United States was to encourage him to give good treatment for his future patients to be or for his future residents who would come to train with him.

I would like to recommend our residents to see this heartwarming movie or read the book if you haven't done so.

最近長野医報に掲載された、許勝栄先生の投稿記事「Pay It Forward」を読んだ(文末に全文を掲載)。内容は、許先生が米国で救急医療の Residency(専門科研修)を無事終えて直接の指導医にお礼にいったとき、その先生は「私にお礼は必要ない。“Just pay it forward”」と言われたという、素晴らしい内容のお話を書いてあったので紹介したい。

この Pay It Forward という言葉を私ははっきり知らなかった。当研修センターの新明香恵

さんが「先生そういう映画があったわ」と言うので、早速その映画の DVD を購入し、その原本を取り寄せて読んでみた。

原作は Catherine Ryan Hyde で 1999 年に POCKET BOOKS から発刊されたもので、内容の概要は、米国のカリフォルニアのある中学校の社会科の授業で、ベトナム帰りの(片眼の)戦傷者の先生(映画では、DV で父親にガソリンをかけられて火傷をおった先生)が生徒たちに自主課題の宿題をだす: Think of an idea to change our world – and put it into ACTION! 生徒の一人、Trevor(12 歳)が世界を良くするための方法としてユニークなひとつのアイデアを思いつく。それは、困っている人がいたら助けてあげるという簡単なこと。ただし、助けられた人は、3 人の困っている他の人を助けてあげること。こうすれば善意の輪がネズミ算的に広がって、いつしか世界中を平和にできるというものである。映画では色々なエピソードで Pay it forward の例が出てくるが、最終的には、Trevor がクラスで苛められている生徒を助けようと、あるとき苛められている現場で不良仲間に単身で歯向かったが、腹を刺されて死亡する悲劇となる。そしてこれを機に Trevor のアル中の母親とクラス担任の戦傷者先生が結婚するという、これも Pay it forward かもしれないアメリカ映画的な結末となった。

Pay というと「(金を)払う」という意味の理解が我々に強いが、Pay には「恩に報いる」という意味もある。従って、恩を受けた場合、恩を受けた人にお礼をするのを Pay back といい、恩を受けた人でない他の人に何か良いことをするのを Pay forward ということになる。Pay it forward, Pay forward と it があってもなくてもよい。

かつて大学在職時代、見学に来た外国人を歓待したところ、帰国してから礼状をもらったが、そのなかで、「I would like to repay your kind hospitality when you visit with us. We have good restaurants here.」とあった。文面から、「今度私に所に来たら金を返す」という意味でなく、「貴方の親切の恩返しをしたい。いいレストランもあるので」となるのは自明だ。ただ、この repay の表現を、私はいまだかつて真似して使ったことはない。万が一「支払う」意味に取られたら、と恐れるからである。辞書的には Repay は Pay back と同義語なのでやはり使いにくい気がする。それならどういう表現でとなると困るが、恐らく「I would like to do all I can in return for your kindness.」となるであろうか。

ところで、Pay it forward の表現はこの映画の前からもあったようであるが、全米と世界に広がったのはこの映画の後である。ただ、その概念は決して新しいものではなく、日本でもあったであろうし、我々も容易に理解できる善行である。

我々が研修の中で指導医から教わったことは、後輩に渡すということで先人の恩に報いたい。そしてその場合、ただ渡す(pass on)するだけでなく何か自分なりの工夫を加えて与えることが出来れば尚よいのであろう。

医学研究研修センター長  
小林 茂昭

## 勤務医のページ

## Pay it forward

相澤病院救命救急センター 救急総合診療科 許 勝 栄



医学部を卒業してから14年になります。まだまだ若輩者でしかありませんが、時がたつのは本当に早いものです。

全く勉強もせずにバイトに明け暮れていた大学時代。なぜだか救急医学に興味をもちました。根が単純で、しかも飽きやすいという、どうしようもない性格でありながら、「人を助けるダイナミックな瞬間に関わりたい」と、漠然と考えていたように思います。今から思いますと、「人を助ける」とは何とおこがましい、と恥づかしくなってしまう。

そんな私が卒後研修を始めた奈良県のある病院。ここは総合診療を古くから取り入れ、レジデント制度としての研修医教育に歴史をもつ病院でした。1000床レベルの大病院でしたが、当時の救急外来は病院の規模にはあまりに不釣り合いなほど狭く古い「部屋」でした。それこそ、Emergency "ROOM" だったように思います。ですが、この救急外来で様々な症状を訴えて受診する救急患者さんの診療が楽しくなってきました。

年齢・性別・訴えも様々……。そんな状況で鑑別をしぼり、適切な救急処置を行う……。

これが楽しくて楽しくて(不謹慎でスイマセン)仕方がない、と感じるようになっていました。「あらゆる訴えに対応できる救急医療をやっていきたい!」と、漠然と思いはじめたのですが、ここで大きな疑問にぶち当たります。

「一体、どこでそんな救急医学研修を受けられるの?」

日本の救急医学は伝統的に3次救命救急、重症救急が主体でした。軽症から重症まで、すべてに対応する救急医学研修を受けられるところなんてどこに……? 当時、アメリカのテレビドラマERが放送されていたように思います。「アメリカの救急外来ではすべての患者を受け入れて対応してるんだな～。こういうの、やりたいんだけどな～。」

でも、その頃の私には「アメリカで救急医学の研修を受ける」ことなんて、実現性のない「夢」でしかありませんでした。

その「夢」がいつの間にか「希望」となり、多くの恩人に助けられ、ある日、「現実」のものとなりました。日本におけるERの父親ともいうべきT先生とH先生。米国レジデンシー応募中に励まして

くださったY先生。米国での私の直接の指導医、Dr. D。この他にもたくさんの方々の支援をいただき、2007年、米国でのER研修を修了することができました。

臨床留学を通じ、救急外来で遭遇する症状に対するアプローチ、疾患についての知識、必要な手技、患者さんのマネージメント、救急医療に関わる法律など、米国の救急医学研修では多くのことを学びました。ですが、留学を通じて私が学んだ最も大事なこと。それは、これら医学的な知識や技術などではなく、私を導いてくださった先生方に共通する、“Pay it forward”という姿勢でした。

米国での研修最後の日、公私ともにお世話になったDr. Dに私は言いました。

「お世話になり、本当にありがとうございました。ただ、今の私にはお返しできるようなものが何もありません。」

これに対し、彼が静かに、それでいて力強く言ってくれたこと……。

「私に何かを返す必要は全くない。君が学んだこと、助けてもらったことを、今度は君が若い人たちに伝えていけばいい…… Just pay it forward!!」

“Pay it forward…”

長野県松本市に赴任してまだ一年半あまり。これからも、救急外来での診療を通じ、若い研修医たちに私が学んだことを地道に伝えていきたいと思っています。この言葉を胸に……。